

≡≡≡ 文献抄録 ≡≡≡

指の体積減少のための紐巻き法と マッサージとの比較

手指の浮腫の治療に用いられる絞り上げマッサージと紐巻き法の効果の比較およびこれらを組み合わせた場合の効果の比較を行った。24歳から61歳の男性4名女性10名、計14名的手指に浮腫のある患者を対象とした。疾患はColles骨折などである。用いた方法は以下の4種類である。手技A：マッサージ；指の全長にわたって遠位から近位へ絞り上げるようにマッサージを行う。手技B：紐巻き法；爪床から指の根元まで隙間無く紐を巻く。手技C：紐巻きと持続的マッサージとの組み合わせ法；手技Bの方法で紐を巻き、その上からマッサージを治療時間中持続して加える。手技D：間歇的紐巻きとマッサージとの組み合わせ法；手技Cと同様だが、マッサージ20回ごとに紐巻きを取り外して再び巻くことを繰り返す。

第一回目の治療で第二指から第五指の4本の指に対し四つの異なる治療手技を無作為に行い、次の治療では前回と異なる組み合わせで治療し、計4回の治療で

結果的に一本の指に対して4種類の治療手技を行うよう計画した。治療時間は各手技5分間である。

指の体積はPIP関節の中央の周径を各治療の直前と直後とに計測することで評価した。実験前に行われた周径計測の信頼性の検討で、検者の検査-再検査の測定差は0.5mm以内であった。

14名計56本の浮腫のある指が治療されたが、14名の内6名は2回の治療しか受けなかった。したがって、各治療手技は計44回治療に用いられて評価された。治療と評価はすべて筆者が行った。

各手技による周径減少の効果は、手技C、Dの紐巻きしたうえでマッサージを行う組み合わせの方法が、手技A、Bの紐巻き法単独あるいはマッサージ単独の方法よりも効果があった。また、同じ紐巻きとマッサージとの組み合わせでも手技Cの持続的にマッサージを行うほうが、手技Dの間歇的に巻き紐を取り外して再び巻くよりも効果的であった。手技A、B間には差はなかった。治療の順番による効果の差も検討したが結果として差はなかった。

Flowers KR : String wrapping versus massage for reducing digital volume. Physical Therapy 68 : 57-59, 1988

(信州大学医療技術短期大学部 理学療法士 伊橋 光二)

≡≡≡ 文献抄録 ≡≡≡

PT 最終学年における言語・非言語 コミュニケーションスキルの使用調査

目的：一つ目はPT学生が臨床実習において、コミュニケーションスキルを重要なものとして認識したかどうか、二つ目は学生が臨床場面において、自分の行動にこれらのスキルを具体化させたと思ったかどうか。三つ目は臨床場面において学生がこれらのスキルを実際に使ったかどうかを、チェックすることである。

スキル：この調査に選出されたスキルは、アイコンタクト、声のトーンの変化、顔の表現、接触、聴く能力、興味に反応すること、処方を説明することの七つである。これらを選出した理由は、患者との相互関係・会話をスムーズにし、PTにとって重要と思われたからである。

対象：29人のPT最終学年生(男性28名、女性1名)。最終学年にした理由は指導者の助けを必要としないで患者を評価・治療しながら観察できる可能性が大きいからである。

方法：スキルは観察チェックシートで記録され、観

察終了後被験者にアンケートが実行された(アンケートの目的の一つ目、二つ目のため)。

結果：PT学生はこれらほとんどすべてのスキルを重要と思っているのがわかった。学生はこれらのスキルの知識を充分に有しているが、必要なスキルを充分に身に付けていないこともわかった。そのもっとも良い例は、臨床における学生のスキル使用を過大評価の傾向にあった。観察されたスキルの中で、アイコンタクトと処方説明はもっとも頻繁に使用されていて、声のトーンの変化と接触は中等度に使用され、顔の表現、聴く能力、興味に反応することがもっとも使用頻度が低かった。これらの調査結果は今のPT教育ではスキルの知識は与えられるが、これらのスキルをカリキュラムの中で実習し発展させることが少ないことの反映かもしれない。これらのスキルのトレーニングは患者とのコミュニケーションを良くし、社会の視聴の中でPTのプロ意識を改善の手助けとなると結んでいる。

Dockrell S : An investigation of the use of verbal and non-verbal communication skills by final-year physiotherapy students. Physiotherapy 74 : 52-55, 1988

(国立犀潟リハビリテーション学院

理学療法士 藤原 俊郎)

≡≡≡ 文献抄録 ≡≡≡

手指の巧緻性テストである 9本ペグ棒使用時の成人用の標準化

手指の巧緻性を敏速かつ簡易に評価するために作業療法士は、9本ペグ棒テストを用いることが多い。しかし、このテストの標準的施行方法ならびにその標準値についての報告は非常に少ない。本研究の目的は、このテストの施行方法の標準化と標準値を定めること、検者相互間やテスト一再テスト間の信頼性を検討することである。

机上に9個の穴あきペグ板とペグ棒の入った容器とを用意し、被験者に、できるだけ速く、ペグ棒容器からペグ棒を取り、ペグ板の穴へ差し、再びペグ棒容器に戻すように指示した。検者は、被験者が最初のペグ棒をつまむときから、最後のペグ棒をペグ板より抜き取りペグ棒容器に置くまでの所要時間を測定した。

利き手から測定を始めた。利き手の判定は、ペンを持つ側とした。26名の女子学生(20~39歳)から求めた検者相互間の相関係数は、右手では $r=0.97$ 、左手では $r=0.99$ で高い相関がみられた。

テスト一再テストについては、右手では $r=0.69$ の高い値を示し、左手では $r=0.43$ の中等度の相関があった。しかし、反復回数によって相関係数が変動するため、何回の反復がより高い相関を示すかについては、今後検討する必要がある。

9本ペグ棒テストとPurdue Pegboardとの相関は右手で $r=-0.61$ 、左手で $r=-0.53$ の負の相関がみられたことから、両者のテストは手指の同じ巧緻性を測定しているものではないことがわかった。

20~94歳(628名、男:310名、女:318名)までを5歳間隔で12段階に分け、9本ペグ棒テストの各年齢層での平均値は年齢が上がるにつれて遅くなる傾向を示した。すなわち手指の巧緻性は年齢とともに低下する。また、女性が男性より若干手指の機能が良いこともわかった。この傾向は、他の種々のテストでも同様に得られるので、9本ペグ棒テストに特徴的なものではない。さらにこのテストの施行には未解決の点が五つあり、作業療法士が用いる場合には、その評価に慎重でなければならないと述べている。

Mathiowetz V, et al: Adult norms for the nine hole peg test of finger dexterity. The Occupational Therapy Journal of Research 5: 24-38, 1985

(弘前大学医療技術短期大学部 作業療法士 藤井 浩美)

≡≡≡ 文献抄録 ≡≡≡

おもちゃ作りの両親への指導；早期にかかわるための実用的なガイド

かなり長い論文である。主題はプレ・スクール児のおもちゃ作りを考えるための原理である。

子どもたちにとって創造の場は重要でありこの創造的環境が提供されるには、おもちゃ作りを通じて両親の創造性を育てていかなければならない。

子どもは何で遊び、どの活動を選び、必要とする材料は何か、どの程度のかかわりを求めているかなどは、成長や発達とともに変化していく。この成長と発達の一部として、両親が提供する遊びの経験のタイプが重要なのである。そして、実際のおもちゃ製作の場としての工作所は、親たちの情報交換、製作技術の取得、友情育成の機会、作られたおもちゃを通じての家族関係の充実、一般社会資源の活用など、多くの目的を有している。そこで作られたすべてのおもちゃは、大人

と子どもとの間の相互作用を早期から促すものである。

正常認知発達の刺激のためのおもちゃは、ジュース瓶やミルクボックスといったスクラップ物から作られた。また、個性を概念化し、コミュニケーションと自己表現を実現する媒体としてあやつり人形が作られた。粗大運動発達を高めるものとしては、タイヤのぶらんこ、種々のトンネルなどが作られた。

その結果、母親たちから、安全性または発達上の根拠からしても、市販のおもちゃの不適切さが指摘されたり、もっと多くの工作所の設立が要求されたりした。

最後になるが、教師やセラピストのようなスペシャリストではなく、子どもとともに生活し働いている誰もが近づきうるおもちゃ作りであることが強調されている。

Esdaile S, BAppSci (OT), et al: Teaching parents toy making; A practical guide to early intervention. BJOT 50: 266-271, 1987

(久山療育園 作業療法士 古森美奈子)